

2016/5/16 第54回例会

<卓話講師紹介：照木健様>

こんばんは。今晚は会報と一緒に配布されました吉川一義先生のお話を御願いたしました。1977年パリにおいてになり文学博士を取得され、お帰りになりましてから東京女子大学、東京都立大学、京都大学でそれぞれ教鞭をとられまして、京都大学で定年を迎えられました。それからそこにいろいろな業績、著書・論文が載っておりますが、フランスでというか今は世界で1、2を争う小説家になりました。マルセル・ブルーストが研究のご専門でありまして、現在岩波書店からマルセル・ブルーストの『失われた時を求めて』の翻訳をなさっていらっしゃいます。厚いので14冊になると伺っておりますが、9冊まで終えられたところでもあります。これもちょっと落としていると思いますが、こうした数々の業績、それから日本だけでなくフランスのブルースト研究をリードしておられまして、「学士院賞」を受けられております。「学士院賞」は文化系の研究者から言えば最高の賞でありますけれども、これにおまけがつくことがありまして「恩賜賞」というのがついております。「学士院賞」、「恩賜賞」を受けられますとその後、やがて「文化勲章」を多分受けられると私は思っております。

今日は30分だと御願いしましたので、その経路といいますか初めから現在に至るまでの道筋をと思いましたが、30分ではとても間に合いません。きっかけだけでも、或いはさわりだけでもと御願いしておりますので、早速伺いたいと思います。ではよろしく

<卓話・吉川一義様>

照木先生は私が仏文学の研究の大先輩でいらっしゃいまして、照木先生からご依頼がありましてお引き受けいたしました。こういう会には慣れておりませんので皆様のご期待に副えるかどうかわかりません。今ご紹介いただきましたように仏文学の勉強をしております。東大の仏文科というところで勉強し、その後大学院に入りまして20代後半にパリに約3年半留学しました。今ご紹介がありましたブルーストというフランスの作家の作品を、日本だと例えば漱石のいろいろな原稿が残っておりますように、そういうものがパリの国立図書館に残っております。その当時、まだ図書館に入って10年くらいでそれを読んで解説するということは、ほんの一部の人しかやっていたものですから、それを調べて博士論文を書いてソルボンヌ(大学)に提出しました。それが私の最初の仕事というか業績で、その後、留学から戻りまして東京女子大学で10年教えました。それから都立大学で18年。都立大学のときはいろいろと問題がありまして、意に染まないこともいろいろありましたが、しょうがない、定年までぶつぶつ言いながらやるしかないかと思っておりましたら、京都大学からお誘いがありまして最後6年間、京都大学へ。東京から京都まで大量の本を持って引っ越して住まいを見つけてまた5年後に戻すというのは大変だったので、毎週旅費が出るわけではないのですが自分が動いたほうが簡単だということで、京都まで新幹線で毎週通っております。大学の側に学生用のアパートを借りて。今、大学生も裕福になりまして、多分、私が一番貧しい生活をしていただいたのではないかと思います。(笑)

それで仏文学の特に 19 世紀後半から 20 世紀初めくらいの文学を勉強しておりました。ブルーストというのが 100 年くらい前の作家で、ちょうど夏目漱石とほぼ同じです。夏目漱石がロンドンに留学して戻ってきて東大の先生になりましたが、その留学していた頃にブルーストという作家はパリで『失われた時を求めて』という小説を書いていた。一体何を話しているのか分からなくて、照木先生に伺いましたら、私が留学した高等師範学校というのがありますが、それは日本ではあまり知られていないので話してはどうかということで、ちょっとだけお話しします。

私が留学したのがソルボンヌという中世以来ある古い大学です。そこに博士論文を出したのですが、同時に高等師範学校というところに籍があって、そこに 3 年半おりました。これはフランスでは日本語で訳すと「高等師範学校」と申しますが、高等教育の教員を養成する機関です。当時文系 60 人、理系 60 人で主に文学部と理学部。歴史、哲学、文学、理科の場合は数学、物理、化学という基礎的な勉強をするところで、全国から優秀な学生が入って、全寮制で既に公務員の待遇で給料をもらいます。そこで教授資格試験という先生になるための国家試験があります。それを準備して先生になるのですが、全員が大学の先生になれるわけではなく、高校の先生になる人もいますが、かなりの人達が今申し上げたような文系、理系コースで大学で教える。フランスはエリート社会で良い点もあれば悪い点もあります。「グランゼコール (Grandes Ecoles)」という日本語で直訳すると「大学校」というような制度です。大学とは別に各分野にこういうものがありまして例えばエンジニアになるといえば、国立土木学校というのがあります。高級官僚とか政治家になるには国立行政学院というのがあり、仏語でエナ (ENA : École nationale d'administration) という略称です。これは現在のフランスのオランド大統領 (社会党) もこの学校の出身で、政敵である前大統領のサルコジ大統領も同じ学校の出身です。右派と左派で政治的な立場は違いますが、二人とも同級生で親しくつきあっているそうです。

こういう制度がありまして、私は留学生だからということで特別に入れてもらっただけです。そこで文系、理系の最先端のいろいろな研究者の集りもありまして、ブルーストの原稿を解説して出版するというような最初のグループができて、そこに入れてもらって先ほど申し上げたような論文を書いた。その成果が今申し上げたのは今から 40 何年も前のことですが、やっと国際的なチームができて、それを解説して今ブルーストの草稿帳というのは 75 冊ありますが、おそろしくフランス人もなかなか解説できないものです。それを国際チームで出版するという計画がありまして、7 年間でやっと 5 冊出しました。まだ 70 冊残っています。一体そんなことをやって何の役に立つのかというのが問題ですが、いずれにしても 18 歳で仏語を学び始めて今 68 歳ですから 50 年、そういうことをやってきたことになります。「十年一昔 (じゅうねんひとむかし)」ということですから 50 年も経ちますと私も変わりましたし、世の中も随分変わりました。演題が「日仏文化交流の今昔」となっていますがそれだけの広い話題について私が 30 分でお話することは勿論出来ませんので、私が勉強してまいりました仏文学、これについての 50 年でどう変わったかを振り返ってみまして感想の一端を申し上げたいと思います。

一番驚きますのはこの半世紀でフランスをはじめ、日本の外国との交流が飛躍的に発展し、

皆さんもそういうお仕事をなさっておられると思いますが、いまや国際交流が当たり前になりました。実は50年前に私が仏語を学び始めたのは1966年です。日本は戦争で大変貧しい状態にあったわけですが、戦後の復興を経て国際化の象徴になったのが東京オリンピックです。これが1964年ですから2年後、私は大阪で生まれ育ち大学に入るために東京に出てきたわけですが、新幹線が出来たばかりで日本の高度成長のはしりの時代でしたが、まだまだ日本は貧しくて今、私共がいる新宿の西口などはバラックが立ち並んでいるような状態でした。欧米-アメリカ、ヨーロッパは先進国でそこから届く輸入品は年配の方は覚えていらっしゃると思いますが、「舶来品」という言葉がありました。これは高価で高いけれども時計にしる何にしる、なかなか壊れない立派なもの。日本製を買うとすぐ壊れる。車もそういう状況でした。

そのフランスも遠い存在で、(萩原)朔太郎が詩にうたった「フランスに行きたしと思えどもフランスはあまりに遠し」という憧れの時代からはまだ少しはましかったと思いますが、私がフランス政府の給費留学生として初めて飛行機に乗ってフランスに行ったのは1973年です。まだ今のような格安航空券というのではなく、一般の普通のエコノミークラスの往復航空券でも数十万円しました。当時の月給はおそらく10万円くらいだったと思いますが、普通の人の月給の10倍くらいの値段でしたから、今だと200万円くらいの値段だったのではないかと思います。成田空港はまだなくて羽田空港から恥ずかしい話ですが、家族に見送られて今から考えると滑稽千万ですが、ネクタイを締めて飛行機に乗る。まだ「洋行」という言葉が残っていた時代です。1年生のときに習った仏語ですが、これが今から考えると乱暴なやり方で、3ヶ月くらいで小文法を習った。習ったといっても私はあまり授業にはちゃんと出なかったので、「先生が教えていた」。仏語は動詞の活用が結構複雑です。これを覚えないとなかなか仏語がものにならない。動詞は今ならちゃんと会話で覚えるのですが、「動詞活用表」という現在形、過去形という膨大な表があり、動詞の活用の授業がありました。先生は現在形であろうが過去形であろうが関係なく。英字の最初から読んで復唱させて覚えさせる。これを覚えるというのが無理だと思うのですが、これではやってもものにならないだろうと私は思ったものですから授業に出なくなりまして、その後は自分で勉強しなければならなくなって大変でした。

このように何故そういうことになったかというとはやはりフランスというか、アメリカ、ヨーロッパは先進国で全て学習も受動的なもので、仏語で喋ったり、文章を書いたりというのではなくて書いたものを解説して理解するという受動的な勉強が主流でした。もう少し先に進んで大学院に入って仏文学の論文などを読みましても先輩、先生方の論文はフランスのこれこれによるとこういう説であるというフランスの権威を引用して証明したような、そういう方法がまかり通る。勿論、今、話を簡単にするためにやや単純化しておりますので、私が習った先生方をけなしているのではなくて、皆、大先生で立派な先生方に習って幸せでした。

しかし今申し上げたような、今から考えると教育も研究も笑止千万のような状態であったのですが、逆に当時は仏文学の大ブームでした。古典だけではなくて当時、現代作家であったサルトルとかカミュのような現代作家もリアルタイムで翻訳されて本屋の平台に山のようにならまれて飛ぶように売られていました。それを読んでいたのが私共の世代です。東大の文

学部というのは他の国立大学も同じだと思いますが、定員が1学年300人くらいで、30～40くらいいろいろな学科—考古学だとか心理学だとか—があります。その300人のうち80人～90人が仏文の学生という大人気で、さっき申し上げたようなやり方で仏語を習ったわけです。ものになる人はほとんどいません。80人のうち大部分が仏語はできない。

ですから先生も承知していて卒業試験のとき—私はよく覚えているのですが—大教室に沢山学生がいるのですが、小林先生という当時有名な先生だったのですが、「ちょっと煙草が吸いたいで失礼するが君達はカンニングをしてはいけない」と言う。皆、ソレっと出来る学生の答案をうつしたりしていました。そういう状態—いい加減なやり方なのに仏文学が全盛だったのは翻訳です。先生の重要な役割というのはその文学を日本語に翻訳することですが、その翻訳が飛ぶように売っていたからなのですね。

今フランスの話を上げているのは、広くアメリカ・ヨーロッパという当時の先進国の一例として上げているのだとお考えくださればいいと思いますが、そういう先進国の文化、ひいては文学に人生とか社会を学ぶ規範というかそういうものがある。今から考えれば、私もそれを求めて読んでいたのではないかと思います。おまけにいろいろ誤訳もあったと思いますが、日本語が優れていて、みんな名訳であったと。

サン・テグジュペリの『星の王子さま』はお読みになったかと思いますが。お読みになっていない方もどういふものかご存知だと思いますが、『星の王子さま』というのはそもそもタイトル自体が意識で『小さな王子』あるいは『小さな王子さま』というのが正確な訳です。そもそもタイトルからして名訳なんです。原作が1945年作で翻訳されたのが内藤濯（ないとう・あろう）先生という仏文の大先輩で、この翻訳は1953年に出ました。

これは名訳中の名訳で、この名訳がなければ日本に『星の王子さま』がこれほど有名にならなかったと思います。ところがこの『星の王子さま』は2005年に著作権が切れた。それだけ売れているのだからうちの出版社も出せばどっと売れるのではないかと、ドジョウの下というか二番目のなんとかを狙って次から次へと10点くらいの新訳が出ました。

仏文学者だけではなくて高名な小説家が仏語がそれほどできないのですが、日本語が問題なわけですからライトして多分出されたものもある。それで明らかになったというか大問題になったのは、それだけ読まれていた内藤濯（ないとう・あろう）訳が誤訳だらけだと。散々いろいろと批判されました。正確に読めば間違っているところもあるということだと思います。それだけ批判されても今に至っても内藤濯（ないとう・あろう）訳が一番よく読まれています。それだけ名訳で日本語として原作からちょっとズレるところがあっても原作から独立した名作としての日本語の文学としての価値を持っている。

同じようなことが小林秀雄・訳ランボオ詩集にも言えます。これは高名な批評家が23歳のときに神田神保町の古本屋でランボオ詩集、仏語を。小林秀雄は仏文科の学生だったので、これを読んで感動した。有名な言葉があります。「見知らぬ男が、いきなり僕を叩きのめした」と。それほどの衝撃を受けたというのです。それを順番に訳してランボオ詩集として翻訳を出しました。これが今は勿論岩波文庫に入っていますが、私も学生時代に熱中して読みました。多くの文学青年が小林秀雄のランボウを夢中になって読んだのです。これがやはり現在の私の親しい中地（なかじ）先生という東大のランボウ専門の先生がいらっしゃいます

が、誤訳だらけだそうです。従って同じようなことがいえる。一言で言えば間違いも多かったが、名訳でそれが多くの読者に愛読されたということになります。

50年経った現在はまるで状況は反対です。仏語を学習する人達の勉強の仕方も会話重視になって、若い研究者は仏語をほとんどフランス人と変わらないように操るようになりました。若い大学院生は勿論、日本では大抵パリはじめフランスの大学に留学して博士論文をフランスで書いて帰ってくる。しかもただそれだけではなくて、フランス人も顔負けのような業績が沢山出ています。これは恐らく疑問に思われる方もいらっしゃると思います。外国の文学なのだから、この場合は仏語ですからフランス人に叶うわけがないと。日本文学の場合もそういうふうと考えられます。日本文学を勉強するなら日本人が一番優れていて外国人には分からないのではないかと。私も同じようなことを言われました。

2003年でしたか、ソルボンヌ大学に客員教授として呼ばれて半年授業をしたことがございます。それでその時に都立大学に勤めていたのですが、公務員は2箇所から給料をもらってはいけません。おまけにフランスの教授という公務員としての給料というのが出るわけですから、この辺がふざけているというか。私が京都大学にいるときにいろいろなフランス人の先生を客員教授として何ヶ月かお呼びしたのですが、勿論、給料以外に旅費、滞在費も出すわけです。当たり前だと思いますが、それがパリ大学は出してくれないというので、仕方ないので日本のある財団に旅費・滞在費の申請をしました。そしたら面接がありまして運よく採用されました。その時の面接の先生が有名な社会学の先生です。

「吉川さんはそんな日本人がフランスで仏文学を教えているのは中途半端になるのではないですか」と言われたんです。私はそれがどうしても納得できなくて。外国人だからというハンディを乗り越えてフランス人をぎゃふんと言わせるというような目標でやってきましたが、今の若い人達はそれほど一生懸命やらなくても自然に優れた仕事をしています。

例えば昨年、村松剛(むらまつ・たけし)さんという東大の仏文学-中世仏文学-です。日本の古典を勉強するのに、私は苦手だったのですが、一生懸命勉強しないと古文が読めません。それと同じで古い仏文学はただ仏語をやっただけでは読めなくて、専門的な研鑽を積まないと読めないのですが、この村松さんという方はすごい人で、つい昨年ですが、フランスの出版社から3500ページの中世仏語辞典というのを出版しました。何故そんなことが起こったかという、フランスの最高学府の中世仏語の先生が自分の弟子に辞書を作ってくれと頼んだのですが、何年経っても出来ない。いい加減いやになって何人に頼んでも出来ないの、これは村松さんしかいないというので村松さんに頼んだ。そしたらあっという間に何年かで作ってしまった。

また私の専門のブルーストでは村上祐二(むらかみ・ゆうじ)さんという京大の若い研究者ですが、19世紀末に「ドレフェス事件」という冤罪事件がありました。ユダヤ人将校がスパイ容疑で逮捕されましたが、それが冤罪だった。それでフランスの世論を二分するような大事件に発展しました。ブルーストもお母さんがユダヤ人だったので関係がありまして、この冤罪事件を調べて、それがブルーストの小説にかなり影響を及ぼしたということで、克明に調べた博士論文をフランスで書きました。これは私が今、勿論翻訳したり勉強したり非常に大きな影響を受けたのですが、私のみならずフランスの研究動向も左右するようなセンセ

ーショナルな論文でした。今の状況はそのようになっていきます。

私は旧世代、ちょうど50年経ちまして一番最初の旧世代の先生方と今のバリバリの若い先生方の中間というか橋渡しをしたような役割ですが、フランスでもこの膨大な「プルースト書簡集総合索引」というものを作りました。40人の仲間と。

先ほどの照木先生のお話で「学士院賞」と「恩賜賞」をいただいたというお話をしていただきましたが、プルーストと絵画についてフランスで出した本があります。対象になったのはその本です。ですから今の仏文学の研究というのはそのような状況になっています。まさに50年、隔世の感があるのですが。これは別に外国文学だからハンディがあるのは確かですが、そういう外国の文学の研究も自然科学の研究と同じで、国際的な当たり前の状況になったと。別に物理学の研究をするのに日本人だからとか関係ないのと同じです。逆に言うとフランスの日本文学の研究についてもあてはまります。昔はフランス人はほとんど日本人のことを知らなかった。私が最初留学したときも、すでに50年前ですが、本当かなと思われるかもしれませんが、よくベトナム人と間違われました。何故かと言いますと、ベトナムが植民地だったものですからベトナム人が沢山いて、ベトナム料理店というのが沢山ありました。中国人とかはまだ文化革命で、ほんの一部爪入りの学生がいなかったわけではなかったのですが、ほんの一握りでした。そういう状況でしたから私のことはベトナム人だということですから、日本のことなどある程度教養がある人でも知らない。まして日本文学のことなどほとんど知りませんでした。

ところが今は恐らくマンガの影響ですね。マンガが仏語に訳された。フランスの小さな子供達がレストランへ行って、ごはんをちゃんと食べないでマンガを読んでいる。そういうので育った世代がマンガから徐々に別の日本の文化にも興味を持って、昔は三島由紀夫とか川端康成とかほんの一部の作家が訳されていたのですが、今は恐らく皆さんもお読みにならないような現代の日本の作家のものを。日本人作家であれば日本では読まれなくてもあっという間に仏語に翻訳されてパリの本屋に山積みになっています。したがって逆に言うとそれだけではなくて日本の古典－『源氏物語』とか『古事記』－を研究するような優れた研究者が現れて日本人には到底理解できないようなものの翻訳、仕事が次から次へと出ています。同じような状況になったということです。

ところが今日本では逆に仏文学が全然興味がもたれなくて、例えば東大仏文学は当時は80人くらい学生がいたのですが、今はわずか数人で、おまけに先生方にお聞きしますと大学院まで進んで私のように専門的に勉強をしようという学生はほとんどいないような状態になっているそうです。何故こんなふうになったかと言いますと、分かりませんが、それは学問が専門化したから一般の人がついていけなくなったせいだというふうに言われたりします。

一時、「理科離れ」というのがあって、私は小さい時は理科少年で祖父の屋根裏部屋に実験室と称していろいろなものを持ち込んでゴボゴボ実験して、将来は大阪で育ったものだからどちらかという京大の理科に進んでロケットでも飛ばすような仕事をしたいという夢を見ていた少年だったのですが、とても今から考えるとそんな才能はなかったと思います。そのロケットも月に着陸して人間が歩くようになると次から次へと先へ進む

と、とても素人には理解できないような状況になったために「理科離れ」になったのではないかと。一時理科の先生達が中学、高校までいく授業をしていたという状況があります。

仏文学もそれと同じだと。確かに先ほどの村松先生の中世仏語辞典を使う人はいないでしょうし、仏語の論文を読むわけでもない。だけどそれだけではなくて私が勉強していた当時の西洋文化に対する憧れ、これがなくなったせいではないか。日本が先進国になって特にバブル景気で日本が世界一の経済大国であると言われて、欧米にもはや学ぶものがないと言われた状況ですね、これが大きいのではないかと思います。

ただし、では日本のことならよく勉強されているかということそうではないんです。広く今は恐らく私には分かりません。皆さんのほうが経済の状況にお詳しいと思いますが、あまりにもバブルがはじけた後の日本の経済の退潮がひどくて、恐らく既にバブル経済がはじけた後、20年くらいの経済の低迷が続いています。勿論、皆様も私もそれぞれの分野で一生懸命やっているわけですが、一時のような豊かな余裕というのがなくなって、一種の合理化で皆がアクセク働いているのに、それほど時間の余裕もなければ金銭的な余裕もないというような状況になっているのではないかと。従って自分のことが精一杯で、それ以外のことは考えられないような状況があるのではないかと。残念ですが、それは日本だけの現象ではなくて恐らくアメリカ、ヨーロッパもそういう状況になっているのかもしれない。

今、アメリカの大統領選挙ではトランプさんが人気を博しているようですが、それはやはり現状に対する不満の表れではないかと思います。要するに主張は結局自分達の国、アメリカならアメリカ中心にアメリカを守ることが精一杯で、よそのことなど構ってられないというような趣旨のようですね。これはフランスでも移民問題が大問題になっていますが、フランスもテロの犠牲になりましたが、それもあって、極右のルペンという父親とお嬢さんが率いる右翼政党が力を増している。要するに外国のものを排斥してフランスを守るといふ。

ですから世の中全体、日本、仏文学のその一端がそこに現れているだけで、そういう余裕のなさという自分のことが精一杯という。しかし不思議なのです。日本では国際協調とか日本の国際化を。大学も国際化をしろというのです。文学部は改組するべしと出ているような有様で、むしろ逆行しているのではないかと思います。

ですから世界がグローバル化して国際化しているのに、各国はそれぞれ自分のことで精一杯という状況になっている。いろいろ大変ではありますが、それぞれが自分の国の文化もそうですが、外国の文化もよく知ることが重要ではないかと思います。

ちょっと遅まきではありますが、勝手に自分の好きなことをやっていて、今頃そんなことをやっても遅いのではないと言われるかもしれませんが、実は『ディコ仏和辞典』というのを作っています。白水社から。仏語の辞典では一番いいのではと思っています。仏語をもう一度勉強したいとか親戚の方とかご子息、お孫さんが仏語を勉強なさるなら是非『ディコ仏和辞典』を。それをよく勉強すれば仏語がよくできるようになると。

それと照木先生もご紹介くださったような翻訳をしています。これはまだ3年くらいはかかりそうです。なにせ14巻もありますので皆さんに読んでいただくものではないでしょうが、もしうまく最後まで完結すれば、さわりだけを抜粋したようなブルースト箴言集のようなものを作ろうと思っております。その節は是非お読みくださればありがたいと思いま

す。ご清聴ありがとうございました。

<閉会点鐘・黒岩会長>

吉川先生、どうも今日はありがとうございました。仏文学には非常に興味があります。シャンソンも仏語ですね。シャンソンがお好きな方も3~4名いらっしゃいまして、今度お入りになった伊瀬さんもシャンソンがお上手で仏語で多分歌っていらっしゃるのではと思っております。私は建築を勉強しております、縁がなかったのですが、25~26歳の頃、ひょんなことでフランスに連れて行かれまして、お金はポケットに15万円くらいしかなくて。それでもコンコルド広場の前に本社があったカルチュエに行きまして65,000円のなめしの名刺入れを買って。あとは8,000円のお酒を。あの頃ナポレオンが3本買えました。何もできずにウロウロして。100円の皿を20枚買ってきて友達に配った記憶があります。

本当に文学とか芸術に私は全然縁がなかったのですが、そういう出会いで行ったのですが、パリの街は素晴らしい光景で、何処で写真を撮っても絵になるんですね。樹の前でも橋の前でも喫茶店でも。トイレの中で写真を撮っても絵になるというフランス、パリの街であったと思います。

それを吉川先生のように、学問で今もがんばっていらっしゃるというのは私共日本人の誇りであると思います。益々ご健康に気をつけられまして、20年、30年とご活躍いただいて後に続きます人に道筋をつけていただきたいと思います。今後とも時間がある限りお遊びに来ていただいて、私達にいろいろとご教授いただければと思います。今日は吉川先生に感謝申し上げまして第54回目の例会を終わらせていただきます。